

## 四

——太古の昔。

全ての動物がまだ、海という温かく温和な環境の中で暮っていた時に、ある種族が陸地を目指した。

海と比較すると恐ろしい程に劣悪で過酷な環境である陸地を、何故その種族は目指したのだろうか？

陸地は強烈な太陽光線が降り注ぎ、厚く重厚な皮膚で保護しなければ、その内部の身体組織を破壊しかねない程に強烈な紫外線に満ちており、酸素は、面倒な過程を経なければ吸収することの出来ない遊離状態で存在し、そして、海中では優しく身体を受止めてくれた浮力もさえも存在しない。そのような海と比較すると悪夢のような世界を、何故その種族は目指したのだろうか？

それは、その種族が海中と言う「楽園」では生息を許されない程に、邪悪で罪深く、そして強力な種族であったからなのではないだろうか。自然と言う「神」に、海と言う「楽園」を追放された種族、それが初めて陸地を目指した種族なのではなかったのか。

その種族はどのように己の身体を変化させたのだろうか。

大気の乾燥と強い太陽光線から身体を保護する為に皮膚を固く厚く装甲し、外骨格を作り上げ、浮力の存在しない世界で行動する為に、自らの体重を支える為の筋肉を発達させて、脚と言う非能率的な器官を作り上げ、その優雅とも言える流線型の体形までも棄て去ってしまったのだろう。そして、遊離した酸素を身体に吸収する為に肺を形成し、空気に混ざり混む塵を取り除き、冷たい空気を暖める為に必要な長い呼吸管を発達させたのだろう。

その身体の全ての変化が完了した時、もしその種族に感情というものがあったならば、己のその姿を見たときに嘆きの叫びを上げたであろう。醜悪で、海中の楽園で暮っていたときとは似ても似つかぬ、その醜い己の姿に強い嫌悪を覚え、己の罪の深さと過酷な陸地でこれから償わなければならぬ永劫の借罪の時を思い、己の犯した罪の深さに嘆き悲しんだ事だろう。

そしてその種族は、過酷な陸地で生延びる為に更に己の性質までを変化させた。獯猛に、凶悪に、そして更に食欲に、淫らに。己の種族を過酷な環境で繁栄させる為に。

時は流れ、ある時その種族の中から、もつとも狂暴な種族が生み出された。

その者共は二本の脚で歩き、奇形的に発達した脳を持ち、その知能に見合った邪悪さをもって

して瞬く間に他の種族を支配し、暴君として君臨した……。



私は万年筆の動きを止め、その、文章を趣くままに書き連ねていたノートの頁を引き千切る。固い紙を手の中で丸めると、乾き切っていないインクが手を汚し、私は屑入れに丸めた紙を投げ入れる。

科学的な根拠も無く、まるで似非宗教の経典に出てくるような文章を書き連ねてしまった自身に、私は軽い嫌悪感を覚える。

大きく溜め息を付き、机に両肘を付く。

私は何故、あのような文章を書いてしまったのだろうか？

最初は大学で教鞭を取る時の為の準備と、最近忘れがちになってしまっていた自分自身の頭の訓練の為に書き始めたのだが、いつの間にかあのような方向に思考が進んでしまっていた。

理由は解っている、今朝のあの出来事だ。

いったいあの二人の女は何故あのように淫らになれるのだろうか、何故、まだ合ってから一日しか経っていない私に、あのような痴態を見せる事が出来るのだろうか。

女としては最も秘めておきたい箇所を自ら進んで晒け出し、猫に秘部と後孔を舐めさせ、氣をやつてみせた雅美。

私の陰茎を娼婦でさえやらない程に激しく口と舌で愛撫し、精液を舐め、飲み下した彰子。

そしてあの二人は女同士で決して他人に言えないような行為さえ行っているのだ。淫らに貪欲に、そして陰媚に。

しかし私には、その彰子と雅美以上に気にかかる事があった。それは私自身があの女達の行為に心を引かれていると言う事実だった。

私の子を宿し死んだ女給との交わりでは、終ぞ得られなかった快樂を私に味わせた彰子の行為。

彼女が無くなった恩師の未亡人であり、上流階級の女である事がよりいっそう、私の興味を引き、欲望をたぎらせる要因になっている事に気付いていたが、私自身どうする事も出来ない程にその欲求は強い。

そしてそれにも増して雅美である。

尻を鞭打たれる事で快樂を味わい、後孔でさえも欲望の対象とする美しい娘。初めて屋敷の門の前で逢った時の、あの清純な印象を持った娘が行う、淫らな行為。

両腕を拘束され、後孔に硝子棒を挿入され、快樂によがっていた雅美。テーブルの上で自分の手で尻を剥き出しにし、自慰に耽った雅美。

そしてその姿を見せつけながら、彰子が私に対して行った行為、強烈な快感。

その全てが私の脳裏に蘇り、恐ろしい程の欲望が再び湧きあがる。そして私は、その欲望が何故これほどまでに強く、私を責め苛むのかと言う事に思い当る。私が望めば二人の女は私の欲望を受け入れるのだ、自ら進んで。

私はその考えに捕われ、肯いたままに両手を頭に当て、強く握り締める。しかしそんな行為は、一旦堰が切れてしまったように止めなくあふれだす欲望の前ではなんの役にもたたなかった。

私は破り取った白いノートの紙面を見詰めながら、思い描く。

私の手で雅美を拘束し、尻に鞭を振るい、白い肌に赤い傷跡を刻み込み、秘部に指を這わし、勃起した陰核を捻り上げる時の苦痛にまみれた絶頂に導きながら、背後から傷ついた尻を犯す。

彰子を床に押えつけ、衣服を剥ぎ取り、全身に舌を這わし、淫らな姿勢をとらせたまま、まだ見ぬ秘部と尻を陵辱し、唇に陰茎を押し付け、精を放つ。

二人の女を抱き合わせ、お互いの秘部に淫らな行為を強要し、並んだ二つの尻を鞭打つ。

私は、その私の想像を振り切る為に頭を振り、そして立ち上がる。下腹部でそんな私の行為を嘲笑うように陰茎が勃起していた。

その固く張り詰めた淫茎を意識したとき、私の中で、二人の女が私の前に表れなかったら生涯気付くことのなかったはずの、暗く陰惨で猥的な欲望が目覚め、私を支配する。

餓えた肉食獣が獲物を目の前にして感じるような食欲にも似た、激しく強烈な性欲が生じる。

——「昼にお部屋に伺いますわ……。今度は私だけで」——

彰子の言葉が脳裏に蘇る。

私は時計を見る。十一時十分。何故、待つ必要があるのだ？

私は部屋を出る。



母屋へと通じる渡り廊下で買い物に出る途中らしい雅美がいた。

彼女は、離れから出てきた私の顔を見ると、その表情を心持ち変え、その場からそそくさと立ち去ろうとする。

私は、そんな彼女に近寄りその肩を掴む。

細い肩が手の中でビクリと震えた。

「なにかご用でしょうか？ 今から買い物に出なければいけませんので……」

「彰子奥様は何処にいるの？」

「え？」

問い返す雅美に、私は質問をくり返し、肩を掴む手に力を入れる。

「彰子さんはどこにいるんだ？」

「奥様は……」

言いかけた言葉を彼女は唐突に切り、そして私の顔を、私の顔に浮かんだ表情を見詰める。

「……だ、駄目です。行つては……行つては駄目。奥様の所に行つてしまつたら貴方は……」

私は雅美の言葉を無視し、瞳を覗き込むようにして問を繰返す。

「どこにいるんだ？」

雅美が悲し気に目を逸らし、小声で呟く。

「お風呂場です……お風呂場で湯浴みされてます……」

私はその答えを聞くと、返事を返すこともなく母屋へと向かう。

渡り廊下を欲望に急かされながら歩く私は、背中に雅美の視線を感じる。彼女はどんな目で私を見詰めているのだろうか。

恐れか嫉妬か、欲望なのか。それとも……。

その答えを知ることを、何故か私は恐れていた。



母屋に入ると、私はまっすぐに風呂場に向かう。

風呂場の引戸の前に立ち、中から聞える彰子が湯を使う音を確認し、そして引戸を開ける。

脱衣所で素早く服を脱ぎ捨て、磨り硝子のはまった風呂場への戸を開ける。

風呂場は、食堂と同様に十分な余裕を持って作られていた。珐瑯製の湯船が二つ、そしてその湯船を合せたよりも、広く場所を取った桧作りの洗場。

風呂場には彰子が愛用する薔薇の石鹸の香りと桧の香り、そして湯気が充ちていた。外へと開く磨りガラスの窓から日の光が差し込み、湯気の中で明るい帯を引いている。

そして彼女は湯船の一つに張られた、牛乳風呂の白濁した湯の中にいた。

白く濁ったその湯の中から彼女が、全裸の私に向けて微笑む。

「お待ちしておりますわ……貴方……」

彰子が湯船の中で立ち上がると、湯が彼女の裸体を伝って流れ落ち、下ろした髪が肩と胸に張り付く。

彼女の白い二つの乳房と上を向いた乳首、そして濡れ烏羽色をした下腹部の陰りが私の目を射る。

「さあ、戸を閉めて、こちらに」

戸の前でその裸体に目を奪われ、立ちすくむ私に向かって彼女が手招きする。その浮かべた表情は、妖艶な期待に満ちた微笑だった。

「さあ……あなた……」。

魅入られたように立ちすくむ私に、彰子が微笑を浮べた瞳を向け、ゆっくりと焦らすように片脚を開きはじめる。

足が湯船の縁に掛かると、開いた股間の飾り毛の奥で陰唇がよじれ、その内の桜色をした箇所が僅かに覗く。

私は彼女の、その初めて目にする秘めた部分を食入るように見詰める。視線を感じたのか、更に彼女は私を挑発する。手で下腹部の陰毛を左右にかき分け、僅かにほぐれた秘部を見せつけながら囁く。

「見て……私のここ。まだ娘のときのまま崩れてはいませんわ……」

彼女は、そのまま腰を私に向けて突き出す格好となり、両手を更に左右に引く。広げた指の間で陰唇が大きく捲れ上り、その奥の複雑な襞の形状までを弾けさせる。

やがて彼女はその行為によって欲情を覚えたのか、秘部の上端で息衝く陰核が、その形をはっきりとさせはじめ、湯よりももっと粘度の濃い液体が滲みだす。

「中也綺麗でしょう……あなたのお気に召したかしら？」

囁きながら彼女が、右手の人差指で陰核に触れる。指の腹で円を描くようにその箇所を愛撫すると、すぐに指はなめらかに動きはじめる。

「あっ……」

ため息混じりの声。そして閉じられる瞼。そしてその瞳が開き、私を再び見詰める。

「……気持ちがいいですわ……。男の方に見詰められながら自分を慰める、凄く淫らな気分になつてしまいます……」

私の下腹部で陰茎が持ち上がり、これ以上に無いほど固く痛い程に張り詰め、勃起する。

私が見詰めるなか、彰子がその場で後ろ向きになり背を向けた。

背中の優雅な曲線に続く締った腰部、そしてその腰から急な丸みを帯びて盛上がる尻、どっしりとした太股。完成された女体。

彰子が、顔を背後の私に向けて囁く。

「ここもお好きでしょう……貴方。今朝、雅美のものを見詰めていらっしやっただわね……私のもあのこの時のように見て下さるかしら……」

彰子が前屈みになり、私に向けて尻を突き出す。尻房が左右に割れ、その狭間の女肉がゆっくりと覗きはじめる。脚が開く。

その彼女の動きは微妙で且つ狡猾で、男の視線を充分に意識し、計算したものであった。

大きく開いた尻肉の狭間で、秘めた二つの箇所が晒けだされる。

後ろから見る女の秘部は、動物のそれのように醜く、淫らでそして美しい。

開いた陰唇の上端では、表皮の上から僅かにその内部を覗かせる程に固くなった陰核が息衝き、そこから陰った肌色をした二つの肉厚の襞が後孔の手前まで続く。そんな肉襞の奥には濃い桜色をしたもつと繊細な襞が畳り込まれており、肉の狭間では、小さく尿道口が覗いている。

そしてそんな性器の下では、きつちりと窄まった筋肉によつて形成される膣口が、欲情の徴である愛液を滲ませており、そこから少しの間を置いて、暗色をした後孔の窄まりが、その内部からの衝動による為か微かにひきつき、盛上がりを見せていた。

「お気に召しました？ ああ……」

肉欲に憑かれた者の表情を浮べながら彰子が囁き、そして股間から伸ばした右手で陰核を摘み、小さく上下に擦る。

途端に、耐え切れない風情の声が、彼女の口から漏れだし、私に向けた表情が快樂に歪む。

彰子がうわ言のような声で、私に呟き続ける。

「見えますか？ 私の嫌らしいところが、見えていますか？ ああ……、もつと見て見て、視線で私を汚して……」

秘部に触れる指の間で、粘液が透明な糸を引く。湯船に浸かった脚が、湯を波立て太股が細かく痙攣する。

彰子の左手が、背中から尻に伸ばされ、指が後孔に触れる。

人差指と中指が後孔の左右のすぐ横の肉を押え、広げる。後ろの肉穴がその敏感な粘膜質の内부를晒け出し、そこに人差指が触れる。指の腹が中に分け入り、蠢く。

彰子の上げる声が一段と大きくなり、その息が乱れる。

「ああっ！ お尻も感じますのよ……私。雅美に負けないぐらいに、前も後ろも、みんな、みんな感じますの……」

彰子の、陰核と後孔を刺激する両手の動きが激しくなり、せっぱつまった末の、絶頂を迎えようとする女の声と息遣いが風呂場に響く。

私は下腹に強ばりを感じるほどに淫茎の硬直を意識し、彰子に歩み寄る。

私の動きを見て取った彼女が、尻を捧げるかのように私に向けて突き出し、振りながら、誘う。

私は、快樂の肉の芽を擦り上げている彼女の手首を掴み、秘部から引き離す。

「あっ！」

快樂を求める彼女の手が、私の手の中で震える。その手を私の下腹部で熱くたぎっている猛りに触れさすと、すぐさま彼女は陰茎を握り締める。

快感が走り、私の先端から粘液が滲みだす。

彰子が陰茎を握った右手を前後に振り、摩り上げる。

「熱い、熱いわ、男の方の肉。固い肉……」

私は憑かれた者のように嘯きつづける彼女の、揺れる尻に向けて大きく振りかぶった平手を打ちつける。

張り詰めた尻肉の表面の湯が飛び散り、見事な音が響く。

苦痛というよりも驚きの悲鳴を上げた彰子の、陰茎を握った手の動きが大きくなる。

私は、つづけて二度三度と彼女の尻を打ち続ける。

白い尻の表面に赤く刻印された手の形が繋がり、尻肉が熱く火照りだした頃、彼女は睦言のよな声を上げ、痛みに伴った快感にすすり泣きはじめる。

私は、彼女の手によって刺激される淫茎の快感と情欲の昂ぶりによって、自分の手の痛みさえ無視し、更に強く彼女の尻を打つ。

彰子は苦痛の声と欲情の荒い息を吐き、腰を大きく蠢かす。しかしその手は、更に激しく陰茎を擦り上げ、私の中から嗜虐の喜びを引き出していく。

尿道の窪みから滲みだした粘液が、白く細い手にしたり、短い糸を絡み付かせる。

射精の衝動が生じた時、私は彼女の手を陰茎から振り払う。

中断された快感によって陰茎が二、三度と震える。熱い衝動が付け根の奥でわだかまり、出口を求めてざわめく。

その衝動を無理矢理に押え込んだあと、私は、彼女の尻の狭間の中心で止めなく愛液を溢れさせている膣口に指を這わせる。

「ここに欲しいですか？」

彼女が膣口を撫で回す指をもっと感じ取りたいというように、腰を振り、秘部を指に押付けてくる。

「はい……。入れて、入れて下さい……」

そして彼女は、自らのその言葉によって更に昂ぶりを深め、尻を押し付けてくる。

私が両手で彼女の腰を掴むと、挿入の期待に彼女が漏らした熱い溜め息が聞こえた。

私は、腰に置いた両手を支点にして膣口に亀頭を押し当て、ゆっくりと挿入していく。暖かく、そして強い弾力が亀頭を包み込み、締め付ける。

このまま一気に貫いてしまいたい衝動を押えつけ、動きを止めると、彰子がすねたような声を上げ、尻に乗る私に振り返った。

「奥まで……奥まで。焦らさないで……、お願い……」

ねだる彼女の惚けたような顔を見詰め、私はもう一度その尻を平手で打つ。

「あっ！」

彰子が甲高い悲鳴を上げたとき、半ば挿入した亀頭に彼女の秘肉が絡み付き、いつそう強く締め付けてくる。

「自分で動けよ」

「貴方が尻を突き出して、自分から私を受け入れる所が見たいの」

彰子は一瞬の躊躇もなく、尻を私に向けて押し出しはじめた。

私は、私の陰茎が彼女の肉壁をかき分け、その内部に埋没していくところを見詰めながら、柔らかな弾力が陰茎に絡み付いてくる時の快感を味わう。

彼女が陰茎を根元まで深く内部に受け入れた時、腰を動かし、陰核を私の下腹部にこすり付けるように腰を回し、押し付ける。

溜め息と、男を狂わせるような快楽の喘ぎを彼女が上げる。

私は彼女の膺の動きと、その感触を味わう為に動きを止めて、衝動が耐え切れないものになるのを待つ。

その瞬間が訪れた時、私は乱暴ともいえる程に激しく腰を振り、彼女の内部を肉の剛直で擦り上げる。

強い快感が背骨を突き通り、全身を駆け巡る。

私はその動きに没頭する。

風呂場に立ち込める湯気を貫き通すかのように、甲高く、性の喜びに充ちた彰子の声が響き、充ちていく。

以下、次回へ